やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	35 / 2014 / 30 - 35　(再編集版)
タイトル	北のニホンザル二題 ― 大自然と人里のはざまで
著　者　名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会（青森）

北のニホンザル二題 ― 大自然と人里のはざまで

第10代　室 谷　洋 司

その1　竜泊ラインの猿君たち・・・・新緑の季節

ことし2014年は春5月から足しげく津軽半島突端の龍飛岬方面に通った。チョウの仲間のスジグロシロチョウ類の生態観察とコウチュウ類のカメノコハムシの一種についての分布調査が主目的で、季節を追って咲き誇る草花を愛でるのも、この地が惹きつけてくれる大きな要因であった。

そして必ず通るのが竜泊ラインである。南端の旧小泊側から発すると海抜10mほどから眺瞰台がある海抜475mあたりを通り、灯台がある龍飛の海抜約100mまでくねくねとした曲がり道の連続で、この大自然を削りながらのアスファルト道は痛々しいが、津軽半島突端の山々と日本海、そして津軽海峡の雄大な景色を観るには絶好のコースである。

よく言われることは、「竜泊ラインを通るとニホンザルに出くわすよ」ということである。まったくその通りで、私がここを通った日にちは、次のようである。

2014年5月8日（木、快晴、無風）、5月23日（金、曇り、風あり）、5月25日（日、曇り、風あり）、5月30日（金、晴れ間、風あり）、6月10日（火、霧渦巻く、撮影）、6月18日（水、霧渦巻く、撮影）、6月25日（水、快晴、暑い）、7月9日（水、小雨、晴れ間）でとりあえず5～7月で8回。

そのうち猿君たちに会わなかったのは5月25日と6月25日、7月9日の3日だけ。ここを通るのは大体午前10時から午後1時頃までの間であるが、5月25日は日曜日でいくらか車の数が多かったので遠慮したのかも知れない。6月25日の場合は平日で車の数が少なかったが、あとで記すが餌の茎のついた若葉がほとんど散乱していなかったことと、残骸をいくらか目撃したがそれは枯れてしまっていたことから数日は現れなかった可能性がある。7月9日の場合は、いつもは見られる路上の食べたあとの残骸はほとんど見られず、相当日数にわたって出没しなかった可能性がある。せっかくの機会である。上記のように、2回ほど車から降りないで窓から撮影した。ポケットに入るくらいのコンパクト・カメラで撮ったので鮮明な映像ではないが、それを見ながら彼らの行動を紹介しよう。龍飛に行くときは決まって朝8時30分に青森市を発つ。友人の古木誠さんの運転で、彼は写真ではプロ級、本稿では彼の写真も使わせて貰った。

写真1　車の前にサルの群れが（6月10日）

写真2　見張り役のボス猿？（6月10日）

三厩地区あたりから「あじさいロード」（約13キロ）に入るが、決まって猿君の1番目の「リビングと食堂」になっているのが風車が見える直前のカーブ続きのところから「竜泊ライン」の入口周辺までであ

る。ここには大よそ10時頃に着く。そのちょっと前から、彼には超ノロノロ運転をお願いする。「出てきた！」というよりも、「今日もいるぞ！」となる。写真を見ながら説明をしよう。

写真3　車が動くとそっぽっを向いて早く行け！

写真4　子ザルは道路そばで一心に食べている

車から眺めているだけでは、彼らは一斉に逃げるということはしない。アスファルト道路の真ん中で食事していた群れが、車を避けてちょっと移動しようとする。車はストップ。路上にはセリ科の大きな茎・葉などの根ごと抜きとられた餌が散乱している。1匹のボスザルなのだろうか、あるいは交通整理の当番なのだろうか、車の方に向かってきて、やがて坐って車をにらみつける（写真1と2）。ほかのサルは道路の縁の草むらで外側を向いて「早く立ち去れ！」とでも言いたげである（写真3）。子ザルは草を食べていて、ノロノロと近づいて行ったら、ようやく草むらに隠れて、しかし尚も食べるのをやめようとしない（写真4）。さて何を食べているのだろうか。路上にある植物と同じ大形のセリ科植物と同じものが道路沿いにいっぱい生えている（写真5～7）。

10日と18日は電話線には子ザル3匹が腰掛けたり、オオヤマザクラやミズナラの枝に坐りながら食事中であった。何を食っているかは、車から降りると逃げてしまうので正確に確認できなかった。3匹写っているが皆、手を口に運び食べている（写真8と9）。下

写真5　セリ科植物。抜いたばかり

写真6　路傍にいくらでもある

写真7　時間が経って萎びている

写真8 3匹が枝上に坐って、こっちを見ながら、食べるのをやめない

写真9 その子ザルをアップすると、食べているのが分かる（いずれも6月18日）

の道路周辺では親ザルたちが草を食べていた。写真2ようなボスザルのような行動は、一番最初の撮影時だけで、その後はこのような動作はしなかった。「このヒトというか車は危害を加えない」ということを学習したのだろうか。

昼過ぎにここを通ったときだった。アスファルト道路の中央ライン付近に2匹、ガードレールを背に2匹が並んで坐っていた。ノロノロと近づくと中央ラインの2匹もガードレールの方に移動したが逃げ去ることはなかった。1ペアはこっちを見つめ、1ペアは毛を繕うような仕草をしていた。お腹が満腹で、食後のひとときを過ごしているような風情であった。（写真10～12）

ここのサルたちの頭数はどうなのだろうか。6月18日の場合、竜泊ラインの入口付近では12匹を数え、このうち少なくとも3匹が子ザルだった。同じ日、ここから3キロほど南の眺瞰台近くにも1群がいて6匹ほどを数えることができた。これらは二つの群れなのか、あるいは分かれて行動をしていたのかは不明である。

私の龍飛詣ではこれからも続く。その食事内容はどうなっていくのか。また、これまでとは違った動作も見せてくれるのか。車窓からではあるが、その辺に注目してみたい。

写真10　路上でくつろぐ（6月18日）

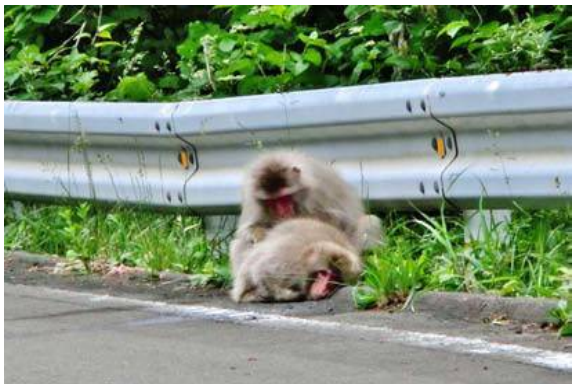

写真11　毛づくろいをしているのか（同上）

写真12　仲良く並んで（同上）

その2　西海岸では傍若無人
・・・・里は実りの秋

2008年9月30日の午前10時過ぎ。私は五能線の追良瀬駅で電車を降り、南の深浦、十二湖方面に向けて歩いていた。早朝、青森駅を奥羽線まわりの特急で秋田県東能代へ。乗り換えて秋田県から青森県に入る。車を運転できない身では、これが一番の早道である。十二湖にあるサンタハウス（当時）のロッジに1泊、同所での翌日の会議に出席するのが所用だった。夕方までの時間をテクテクと徒歩で風景を楽しみながら、秋のチョウたちを愛でるのも良いのではないかと思っていた。

はるか前方に白神山地が、その手前には深浦港が見える。右手の海寄りに民家と、そばには畑があり、さらに周りには草地がある。小春日和だ、チョウたちがいっぱいいるに違いない。

すると、異様な光景に出くわしたのである。畑は横も屋根もネットで覆われているではないか。さらに、その上では3匹のニホンザルが餌の作物にありつこうと一生懸命なのである。中にはキャベツとかつる性のマメが収穫期を迎えている（写真13、14）。さらに入るとクリ林がある。イガグリは色づいて中はもう熟しているだろう。その下には親子のサルが坐っていた。それを食べようとしているのかどうかまで確認はできなかった（写真15）。道路のあちこちにも、民家やハウスの屋根の上にも数匹づつサル

が走り回っている（写真16）。彼らは、近づけば逃げるが2、30メートルの一定の間隔を保ちながら、彼らの日常生活をやめようとはしない。ヒトが強硬手段に出れば歯をむきだして威嚇してくるとか、逃げていくのかも知れない。私は、小一時間ほどサルたちの行動を眺めていた。

写真13　ネットで囲われた畑、前方に白神山地

写真14　ネット上から作物にあり付こうと・・・・

写真15　クリの木陰で親子ザルが

写真16 周りはサルだらけ（いずれも2008年9月30日）

半世紀を経てサルとヒトの社会関係は一変！

昨年（2013年）の野帳に次のようなメモがあった。

5月31日（金）「桜川07:20発、ナビ川内セット。（中略）11時40分「海峡ライン」に入る。夜間通行禁止の標識あり。路上にサル2匹、近くに5匹。やがてブッシュに逃げた。路上には落としたばかりの広葉樹の広い葉っぱが散乱。1キロほど先にもやはり同じようなのが散乱していたが、こっちは乾燥し始めていた。」

下北半島からフェリーで北海道に渡り根室までの調査旅行のスタートラインだった。前記の津軽半島と同じように、まったく同じことが下北の北限のサルたちの日常生活にも見られていたのである。

このとき半世紀前のことを思い出していた。たまたま地元紙「東奥日報」から同紙夕刊に「青森県動物誌」を連載していたときのことである。当時、私は弘前大学の生物学教室にいたが、新聞社から執筆要請があったが学内には哺乳類の専門家がいなかった。一番若い自分にその役が押し付けられたのである。主要研究テーマにしていた昆虫類は、チョウを中心にポピュラーなものはなんとかなる。哺乳類についたは県内に研究家はいない。「お前、勉強のつもりで、これもやって見ろ」、というのが上司の指示であった。哺乳類の頂点にたつニホンザルは、連載中の「青森県動物誌」からはずす

わけにはいかない。

下北半島のニホンザルは、青森県の自然史を特徴づける重要な存在であった。たまたま、北限のサルの生態について京都大学の専門家・東滋氏が九艘泊でサルの社会研究に入ることになっていた。同氏は情報収集に弘前大学にやってきた。その相手を私がやることになっていたのである。何とも変な関係で情報を差し上げるどころの話ではない。逆に私が同氏から種々、指導を受けることになり、得られていた現地資料をもとに「青森県動物誌」に何回かを書くことができた。内容は、「サルの楽園九艘泊のボス猿オソレ一族」の物語であった。執筆後の1966年11月に「下北半島九艘泊のサル群は」特別天然記念物に指定された。オソレとは当時20歳を超えている年寄りザルで東氏が命名した九艘泊の1群の親分であった。（1967年に同名タイトルで単行本として発行された）

1968年7月、下北半島が国定公園に指定された。北限のニホンザルは、もちろんその目玉のひとつ。私は、大学の研究室から離れ、地元の民放テレビ局に勤めて番組制作を担当していた。ローカル番組として県内の各方面の話題がテーマになったが、そのなかで下北国定公園は番組化する価値の大きいものであった。まだ人手で持ち運べるビデオ・カメラなどがない時代である。舶来の高価なアリフレックス（16ミリ・シネカメラ）を携えたカメラマンとデレクター役の私は数日間、下北各地をロケして歩いた。当然、九艘泊のサルは確実に抑えなければならない。東氏が調査の頃は船でなければ行けなかったが、私たちは陸路を渡ることができた。果たしてオソレ一族は元気でいるのだろうか。二人は一抹の不安を抱えながら林の中を進んだ。あたり一面、静まり返っていた。ほどなく、1匹が木から木を渡り、太い枝につかまって私たちを睨み付けていた。チャンス到来！　カメラマンにアリフレックスを回すように合図した。ジージーとフィルムの回る音が周りの静けさのなかで際立って高く響いた。それまで枝上から威嚇していたサルは地上に降りて私の脛を噛み、早く立ち去れと実力行使に入った。私は撮影を続けろ！と痛さをこらえた。この時点で周り全体がサルの群れに取り囲まれていた。何匹いたのか数える冷静さは持ち合わせていなかった。サルの大群としか言いようがない。

撮影が無事、終わって脇野沢の宿にたどり着いた。上司に電話で撮影の成功を話した。すぐロケを中断して病院へ行くように、とのことだったがそうは簡単にあきらめはできない。放送も迫っている。抗議をしたのはそんなに高齢には見えなかった。オソレの後継者であったのだろうか。大ケガをさせるまでには噛まなかった。大した危険人物ではないと見たのか。傷口は数日で癒えた。

先日（2014年6月21日）の地元紙「陸奥新報」に、「県内13年度サル食害 津軽で被害範囲拡大中泊などで新たに報告」という見出しの記事がのっていた。

ニホンザルの県内農産物の被害額は2013年度は約2300万円、過去5年間でピークだった2009年度に比べ4割余り減少したが、リンゴ主産地の津軽地域では被害範囲が拡大傾向にあるのだという。

確かに、下北地域は早くから、ついで弘前市、五所川原市、鰺ヶ沢町、深浦町、西目屋村など津軽地域で食害が確認され、大きな被害をこうむっている地域も少なくない。これらに、新たに中泊町、外ケ浜町、蓬田村が加わったという。本稿の冒頭に書いた「あじさいロード」とか「竜泊ライン」のサルたちは、この新たに加えられた中泊町と外ケ浜町に被害をもたらす一群になるのであろうか。箱わな捕獲（写真17、18）、人手による追い払い、電気柵の設置などで被害を防止しているようだが、人里でうま味を覚えたサル達は増えた一族のメンバーを維持するために、簡単に引き下がるわけにはいかないだろう。侵入防止のための過度の対応は群れの分裂や行動範囲の拡大を招き、さらに対応を難し

くする可能性がある。

なお、捕獲用のトラップについては、たまたま2014年7月21日の下北半島佐井村の昆虫調査の途上で、里山の林道周辺に数個の設置を確認できた。付近には餌としての草本の枯れたものが散乱していたので、この辺にも出没するのだろう。

写真17　捕獲わな。佐井村の林道（右手の奥）

写真18　左と同じ（2014年7月21日）

最初に記した、「竜泊ライン」などで見せた野性に食を求めるのどかなサル社会。しかし、野外で食を調達できる季節は良いが、このあと夏から秋はどうなるのか。里山に近い畑には美味な作物がいっぱい実ってくるのである。

ヒト社会の自然界の生態系への飽くなき進出。その接点での攻防をどのように乗り切っていくのか。あるいは、サル社会の実情をつぶさに観察し折り合いをいかにつけていけるのか。自然界への向き合い方はこのサル対ヒトだけではなく、あらゆる面で生じてくる、いや生じていることを肝に銘ずる必要があるのではないだろうか。